

【資料紹介】知床遠音別神社所蔵の船絵馬

三枝 大悟

知床博物館, 099-4113 北海道斜里郡斜里町本町 49-2

[Research note] The votive picture which prayed for the safety of the voyage “Funaema”
owned by Shiretoko On-nebetsu Shrine

SAIGUSA Daigo

✉ d.saigusa.museum@gmail.com

Keywords “Funaema”, Utoro, Shiretoko On-nebetsu Shrine

はじめに

船絵馬は、海上交通に関わる人々やその家族が、地元や渡航先の寺社に対し、主に海上安全の祈りを込めて奉納する絵馬の一種である。船を描いた絵馬で、18世紀中頃には帆走する船体を横からとらえ、画面いっぱい描く構図が定着した。北前船が寄港する地の寺社では、特に江戸時代後期から明治時代にかけて、日本海側を中心に奉納された。精緻に描かれた船絵馬は、美術史・技術史・海上交通史・民俗学など、様々な分野において重要な資料となっている(石井ら2004; 昆2012)。

北海道オホーツク管内においては、網走市の網走神社と鱒浦稲荷神社に奉納された船絵馬が市有形文化財に指定されている。斜里町は網走市より先に、アイヌと和人の交易拠点である「場所」が設置された歴史をもちながら、船絵馬の現存が確認されていなかったが、2023(令和5)年に1点の存在を把握したため報告する。

「発見」の経緯

本資料は斜里町の最東端の集落で、世界遺産知床の玄関口であるウトロ地区に位置する、知床遠音別神社の社務所で保管されていた。『知床遠音別神社 遷宮三十周年記念誌 かしは手』(米澤ら2008。以下、『かしは手』)では「絵馬」として本資料の写真を掲載しており、筆者が同神社の豊漁祭・宵宮祭(2023

年6月14日齋行)の民俗調査時に桑島昌氏(同神社総務)に本資料のことを尋ねたところ、社務所の大広間内にある、神殿に向かって右側の床部分に、芳名板や額など薄い板状の什器・資料類とともに保管されていたことがわかった。

資料の法量・形状・描画内容

知床遠音別神社所蔵の船絵馬の法量・形状・描画内容は、次のとおりである(図1)。

【法量】

全体: H265×W329×D15mm

板材: H224×W290×D6mm

本紙: H220mm

木枠(船首側): H265×W32×D8mm

木枠(船尾側): H265×W32×D9mm

【形状】

針葉樹製の板材の片面(表面)に、弁財船を描いた本紙が貼られている。板材及び本紙には3つの穴が貫通している。板材は本紙より大きく、本紙の上部を青く塗り足した際に、塗料がはみ出した跡がある。裏面にはディスクグラインダのような旋盤状の工具を用いた場合に特徴的な縦方向の加工痕がある。また、黒色の文字で「維時昭和十七年十二月五日」と記されているが、表面とは天地が逆である(図2)。

板の左右には、桐製と見られる細長い板状の部材が鉄釘で取り付けられている。これは木枠の残欠で、

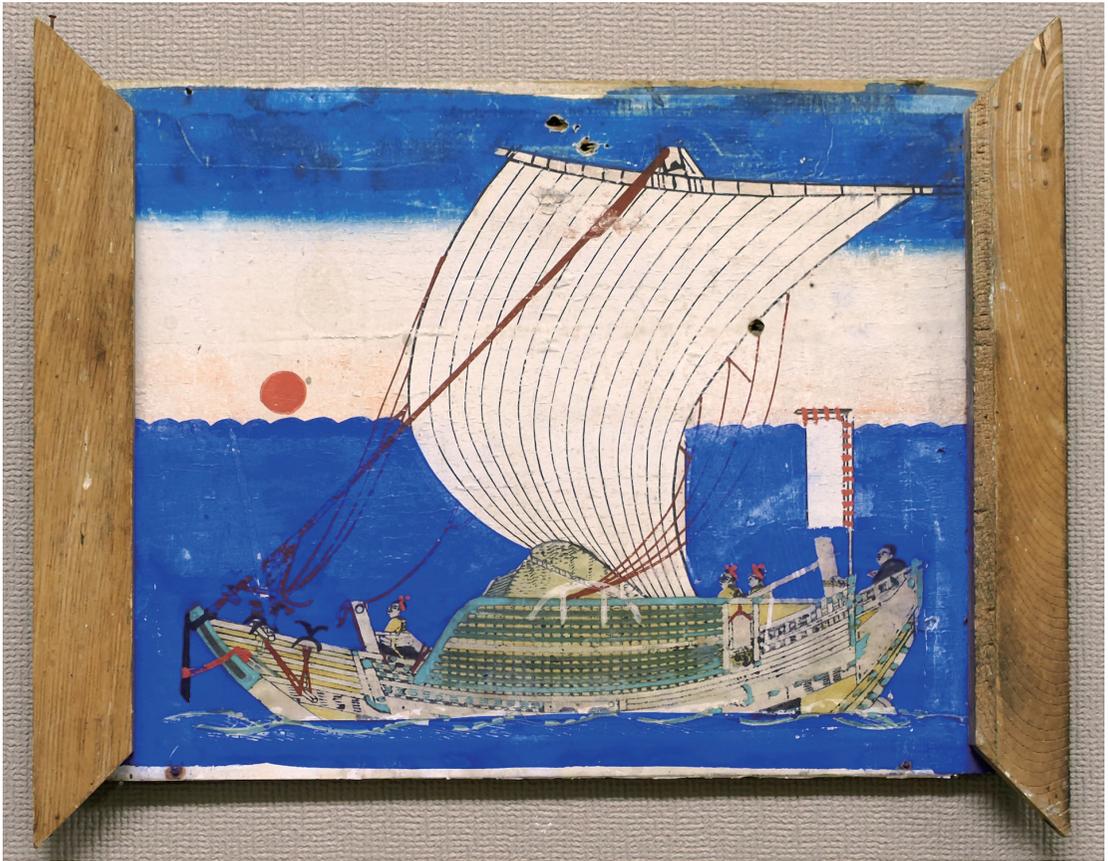


図1. 知床遠音別神社所蔵の船絵馬(表面)

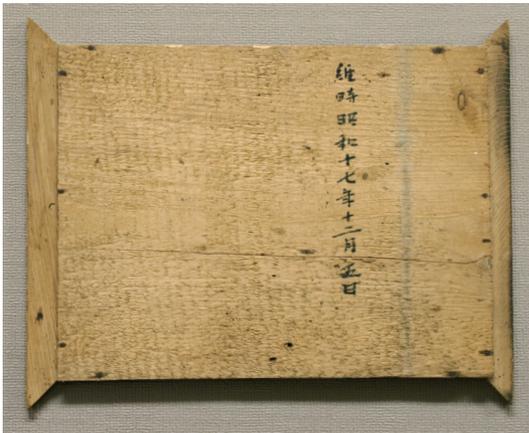


図2. 知床遠音別神社所蔵の船絵馬(裏面, 図1と天地逆)

内側が1mmに満たない程度に一段下がる装飾加工がなされている。天地には本来あるはずの木枠がなく、鉄釘が露出しているが、『かしは手』掲載の写真から、天側に「奉納」、地側に「今井鶴太郎」と右横書きで記されていたことが読み取れる(図3)。

なお、材質について中西将尚氏(斜里町文化財調

査委員会会長)に、裏面の加工について城野誠治氏(東京文化財研究所文化財情報資料部専門職員)にご指導を受けた。

【描画内容】

1 船体

1艘の舟形船が、船首を左に向けて描かれている。船体は濃淡二色の黄色、帆は無彩色または白色、綱は臙脂色、碇は黒色となっており、金属や竹製と思われる部材には緑青色の彩色がある。

帆は16反帆で、船主を示す帆印はなく、幟旗にも船名の記載はない。「蛇腹」(貨物の保護と波浪よけのために船体の側面に取り付けられた部材)は、上端が平坦で角ばった形をしている。船尾側にある「艫車立(とものしゃだつ)」と「隅立(すみたつ)」という部材は、本来は前者が高く後者が低い、本資料では関係が逆転している(図4)。

船体は一部背景を含め、本紙にさらに紙を貼り付けたように盛り上がっている。弥帆(船首側に設けら

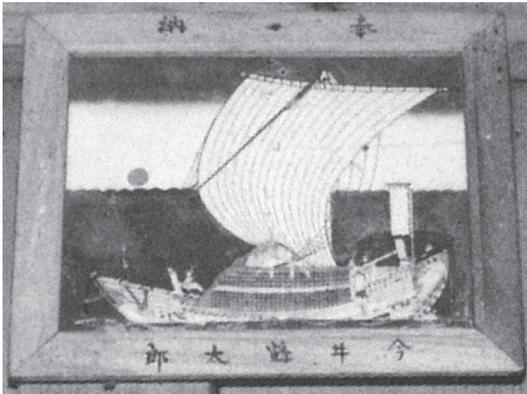


図3. 木枠が残っていた頃の様子
(米澤ら 2008:36p から転載)

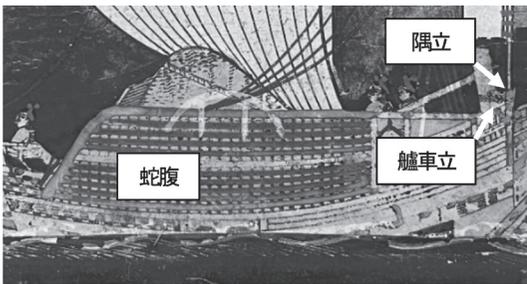


図4. 蛇腹・艫車立・隅立の位置

れる小さな帆)が存在した跡があるが、剥落したようで、同様に蛇腹の上部にもアーチ状の剥落痕がある。

2 搭乗者

総勢4人の人物が乗っている(以下、船首側から人物①～④)。

船首側の人物①、帆の後方の人物②・③は水主(乗組員)と思われ、いずれも黄色い衣と赤い鉢巻を身につけている。衣は襟が黒く染められ、人物①・②の背中には同じく黒色で切伏せ文が描かれている。これはアイヌの樹皮衣であるアットゥシを表現していると考えられる。アットゥシは速乾性と耐水性から和人の船乗りにも好んで利用された(石川県立歴史博物館ら 2022)。船尾の人物④は黒い衣を身につけ、日の丸の扇を持っている。この人物は船頭と思われる。

3 背景

大きく分けて、上部(空・鈍い青色)、中部(空・無彩色または白色)、下部(海・鮮やかな青色)の3つの要素で構成されている。

上部の鈍い青色は、江村知子氏(東京文化財研究所文化財情報資料部部長兼・近・現代視覚芸術研

究室長)の指摘に従うと藍による着色と思われる。

中部には赤い太陽が描かれ、その高度にあわせ、水平線上にうっすらと赤みがかかった彩色が見られる。太陽は楕円形で、明確な光線は描かれていない。

下部の鮮やかな青色はウルトラマリンだろう。緑青色の線で波が描かれている。船絵馬には、背景として陸地や住吉神社などの意匠が描かれる場合があるが、本資料にはない。

4 奉納年・奉納者名・製作者の記載

船絵馬には、本紙内に奉納年・奉納者名・製作者などが記される場合があるが、本資料にはない。

所見

製作時期は記載がなく確定が困難だが、下記の条件から明治以降の作と考えられる。

- ①船体が描かれた紙が本紙に貼り付けられている。このことから、版画で別紙に印刷した船体を本紙に貼り付ける製造法で船絵馬の大量生産を可能とした、嘉永年間(1848年～1854年)以降の作と考えられる(昆 2012)。
- ②蛇腹の上端が平坦で角ばった形状と、水主の鉢巻の着用は、明治以降の作に多く見られる(牧野ら 1977)。
- ③海の鮮やかな青色の顔料として想定されるウルトラマリンは、船絵馬においては明治以降に使用されるようになった(牧野ら 1977)。

製作者も同様に不明である。船絵馬の主流な製作者には、杉本清舟・吉本善京・絵馬藤の3つの系統がある。このうち、杉本系統は船体の描写に版画を用いず、1863(文久3)年には活動を停止する(石井ら 2004)。吉本系統は本帆柱の上部に取り付けられた「蟬」(滑車)を簡略化して描くが、当該資料は描き方が異なる。一方、絵馬藤系統の特徴とされる、艫車立が隅立より低い描き方は当該資料と共通しており、同系統の人物・集団により製作された可能性がある(吉本・絵馬藤系統の特徴については、昆 2012)。

なお、本紙から板材への彩色のはみ出し、表面と裏面の天地の違いには、後補の影響が考えられるが、特定できない。また、旋盤状の工具による加工痕については、幕末に丸鋸が国内に導入され、明治時代には普及していたが(平山 2010; 平山 2022)、他の船



図5. 新旧遠音別神社の位置
(Google Maps から転載・加筆)



図6. 旧遠音別神社外観 (米澤ら 2008; 口絵から転載)

絵馬に同じ事例があるかは確認できていない。

奉納から現在に至る経緯

船絵馬を奉納した今井鶴太郎は、1887(明治10)年に爾志郡乙部村(現乙部町)で生まれた(令孫所蔵の戸籍)。いつの頃か網走に移り、一時は、夏はウトロ、冬は網走を拠点に生活していたようで、その移住時期は、明治40年頃とも(米澤ら2008)、1923(大正12)年ともされる(斜里町史編さん委員会1970)、1935(昭和10)年に本籍を斜里村に移し、1950(昭和25)年に没した。戦前期には斜里漁業組合に所属し、マス建網漁を営む漁業者だった(斜里漁業史編さん委員会1979)。その子孫は現在も今井共同漁業部として漁業経営を続けているが、船絵馬の奉納について資料は残っていない(鶴太郎甥御・令孫への聞き取りによる)。



図7. 旧拝殿内部写真(米澤ら2008;口絵から転載)
本殿に続く戸の向かって左上に船絵馬がある。

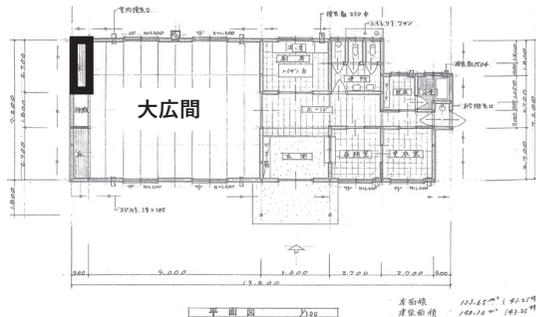


図8. 船絵馬の保管場所
(四角内, 米澤ら2008;口絵から転載加筆)

船絵馬が奉納された知床遠音別神社は建立時期が不明だが、藤野家の漁場で祀られていた稲荷がルーツとされる(斜里町史編纂委員会1955)。藤野家は近世の場所請負人で、明治時代まで現在の斜里町域全体に大きな影響力を有した。幕末の探検家である松浦武四郎は、1858(安政5)年に蝦夷地を旅した様子を記した『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』において、ウトロの番屋のそばに弁天社があったとする(秋葉1985)。当時すでに腐朽していたようだが、この弁天社に知床遠音別神社のルーツを求めらるれば、創建は幕末以前に遡る。

位置は現在の北こぶし知床ホテル&リゾートの西側、神社山と呼ばれる岩山の麓にあったが、1978(昭和53)年に500mほど南の現在地に遷座された(図5,6)。また、名称は1892(明治25)年以降、遠音別神社と称されていたが、2001(平成13)年に運営団体が宗教法人化した際、知床遠音別神社と改められた。祭神は稲荷大明神と住吉大神で、遷座時に近隣の金毘羅神社と八幡神社が合祀された(米澤ら2008)。

『かしは手』掲載の旧拝殿内部の写真には、本殿につながる戸の上に、記念写真や「昭和三十九年春祭 遠音別八幡神社 御神輿奉納者御芳名」の額とともに掛けられている様子が写っている。この時には、現在は失われている上下の枠が残っている状態だった(図7)。その後、遷座に伴い現在地に移転し、いつからか大広間の床に収納されたようである(図8)。

斜里町における船絵馬「発見」の意義

斜里町立知床博物館には、斜里神社(1796〔寛政8〕創建)旧蔵の2面の絵馬が所蔵されている。1面は1838(天保9)年6月にソウヤ勤番の小黒忠八と高田弁蔵が奉納したもので、水瓶形の板に鶴が描かれている。もう1面は藤野家支配人の三右衛門が1862(文久2)年8月に奉納したもので、船絵馬の作者としても著名な吉本善京より三国志の「桃園の契り」を題材に描かれており、斜里町の有形文化財に指定されている。上記2面が斜里町内で現在確認されている中で最古級の絵馬である。

斜里町内の神社は10社以上あり、中には絵馬が奉納されている神社もあるが、その多くは年代不詳である。また、船絵馬は確認されていない。

一方で、戦前に著された米村喜勇衛の『北見郷土史話』によると、斜里神社には「絵馬 帆船額面 嘉永元年十二月五日 願主 藤野喜兵衛」、「絵馬 帆船額面 文久二年八月(吉本善京筆) 願主 総支配人 三右エ門」の2面の「帆船額面」、つまり船絵馬があった(米村1943)。このうち後者は、奉納年・奉納者・製作者が町指定文化財の絵馬と合致し、かつ他に同絵馬の記載がないことから、船絵馬としたのは誤記の可能性がある。よって、少なくとも1848(嘉永元)年奉納の船絵馬1面があったといえる。

知床遠音別神社の船絵馬は明治時代以降の作と考えられ、米村が紹介したものと直接関連するものではない。しかしながら、この度の船絵馬の「発見」は次の三点で意義があると考えらる。

- ①米村の記録を最後に長く姿を消していた斜里町における船絵馬の存在が、新たに確認されたこと
- ②近世以来の漁業拠点であるウトロ地区において、海上安全祈願を象徴する伝統的・全国的な奉納物が確認されたこと

③本資料が船絵馬の分布上、日本最北東端とみられること

ただし、多くの船絵馬が大正時代までに奉納されたのに対し、本資料は年代が大きく異なる。地域間の価格差を利用して中継貿易を行った北前船は、大正時代には電信技術の普及により価格情報を独占できなくなり衰退した。本資料が奉納された1942年には、北前船の時代は過ぎ去っていたのであり、他地域の船絵馬と同列に評価することはできない。

課題

知床遠音別神社の船絵馬の「発見」の意義を論じたが、未だ課題が残っている。

第一に、船絵馬の入手経路の問題がある。多くの船絵馬は大阪(坂)で製作・取引された。今井家が北前船に関わっていれば入手する機会があっただろうが、新出資料がなければ確認は困難である。

なお、1849(嘉永2)年には敦賀に大坂出来の船絵馬を取り扱う代理店があり、「大きな港には大坂の絵馬屋の代理店が存在した可能性は大きい」ことが指摘されている(石井ら2004)。また、1876(明治9)年には、大坂から若狭経由で江差に入港した北前船利宝丸が貨物として絵馬を積載していた記録がある(江差町史編集室1982)。道南出身の今井家の周辺に、船絵馬が流通する素地はあったといえる。

第二に、奉納年代の問題がある。前述したとおり、1942年には北前船交通が終焉を迎えており、船絵馬の製作や流通もなされていなかったと考えられる。

藤野家所有船長者丸の船頭を務めた松本金蔵の子孫には、1850年代半ばの製作と推定される同船の船絵馬が伝わっている。これについて、「奉納年月も奉納者名も書き入れがなく、となると、これは金蔵が自家用として大阪で買入れて所蔵したものか、あるいは何らかの理由で奉納する機会を失い、そのまま家に伝えられることになったものかのいずれかであろう」と指摘されており(石井1979)、今井家でも同様のことがあったうえで奉納に至ったのかもしれない。

塚田直哉氏(上ノ国町教育委員会事務局社会教育担当局長)・田中祐未氏(北海道博物館学芸員)によると、上ノ国町では町教育委員会が町史編さん事業の一環として早瀬の稲荷神社を調査した際、6面



図9. 上ノ国町早瀬の稲荷神社の船絵馬(写真は田中祐未氏提供。昭和18年8月16日願主 鈴木マサミ奉納)

の船絵馬が見つかっている。うち5面は1943(昭和18)年8月に奉納されており、3面は反帆数や乗組員の数と配置、背景まで、知床遠音別神社の船絵馬と酷似している。奉納者や奉納年月日を本紙ではなく額に記載する体裁も、知床遠音別神社の船絵馬と同様である(図9)。同神社は1791(寛政3)年の創建で、内陸部にあり、海上交通との関係は見えない。船絵馬はこの調査で初めて発見され、詳細は今後の研究の進展を待つ必要があるが、奉納時期や体裁の近似から、入手経路等が関連する可能性がある。

おわりに

知床遠音別神社の船絵馬は明治・大正時代まで全国的に行われた船絵馬の奉納とは異なる来歴を有し、未だ不明点が多い資料である。しかしながら、現時点において、本資料が斜里町域に伝来する唯一の船絵馬であることは確かであり、斜里町域の海と信仰の関わりにおいて貴重な存在であるといえる。

謝辞

本稿の執筆にあたり、次の方々にご指導とご協力を賜った。

今井鶴太郎令孫・甥御、江村知子氏、桑島昌氏、城野誠治氏、高野宏康氏(小樽商科大学グローバル戦略推進センター客員研究員)、田中祐未氏、塚田直哉氏、中西将尚氏、米澤達三氏(知床遠音別神社

責任総代表)(五十音順、所属はご協力当時、本文で触れた方の場合所属省略)

ここに記して感謝申し上げる。

引用文献

- 秋葉実(解説). 戊午東西蝦夷山川地理取調日誌中. 北海道出版企画センター. 札幌.
- 石井謙治. 1979. 近世後期における廻船の航海一松前柏屋長者丸の場合一. 児玉幸多先生古稀記念会(編). 日本近世交通史研究. 吉川弘文館. 東京.
- 石井謙治・安達裕之. 2004. 船絵馬入門. 船の科学館. 東京.
- 石川県立歴史博物館・小樽市総合博物館(編). 2022. アトウイー海と奏でるアイヌ文化. 小樽市総合博物館友の会. 小樽.
- 江差町史編集室(編). 1982. 江差町史 第五巻 通説1. 江差町. 江差.
- 昆政明. 2012. 青森県の船絵馬. 青森県立郷土館研究紀要36. 青森
- 斜里漁業史編纂委員会(編). 1979. 斜里漁業史. 斜里漁業史編纂委員会. 斜里.
- 斜里町史編纂委員会(編). 1955. 斜里町史. 斜里町役場. 斜里.
- 斜里町史編さん委員会(編). 1970. 斜里町史 第2巻. 斜里町役場. 斜里.
- 平山育男. 2010. 江戸時代末期のグラバーを取扱人とする機械製材について. 日本建築学会計画系論文集75-652. 東京.
- 平山育男. 2022. 戦前期における機械製材機の普及とその背景. 日本建築学会計画系論文集87-797. 東京.
- 牧野隆信・刀禰勇太郎・西窪顕山(編). 1977. 日本の船絵馬一北前船. 柏書房. 東京.
- 米澤達三・桂田鉄三・佐々木富美男・新田実・上野山文男・桂田隆行・桑島昌・甕岡豊(編). 2008. 知床遠音別神社 遷宮三十周年記念誌 かしは手. 知床遠音別神社. 斜里.
- 米村喜男衛. 1943再版(1933初版). 北見郷土史話. 北見郷土博物館. 網走.